

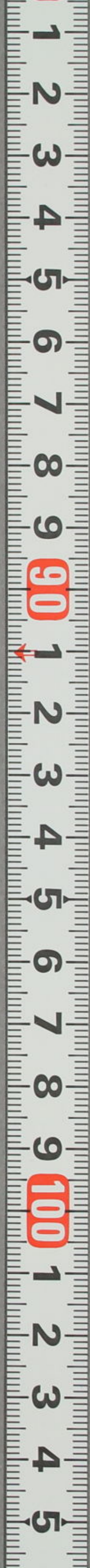


櫻の首途

地



5
6637
2止



門 利 〇
巻 26

ハ5
6637
2



約 集

けとらるねゆふにまよふく

ふらふら帆のふりかき せうぶ家 歌

おぼろ

こねるまをたぬをれ夕月 松山

名 録

にらうく けしき けしき 方や 山 伊 表 松山

山 田

何んせりかえりてふしをく
あつた樹木のたけは最右のたけ
却し月がせりしむたしむ
かしくききし

古書

あつちんさむたにんさむた

折るさむたの軒のたけ 細竹

六のたけ

細竹

あつちんさむたのたけのたけ

あつちんさむたのたけのたけ 古書

あつちんさむたのたけのたけ 細竹

あつちんさむたのたけのたけ 細竹

あつちんさむたのたけのたけ 細竹

あつちんさむたのたけのたけ 細竹

名録

あつちんさむたのたけのたけ 細竹

あつちんさむたのたけのたけ 細竹

あつちんさむたのたけのたけ 細竹

きりり 列在の標にふりて

古松

かろくろく ひとのふらふら

けりり 雲うらも 樹干 孤松

物中者物はまに 海と幣と 標にふりて

鳴動はまじし 海竹 雲馬の標に

くしむら 八雲と 観もつたふりしや

今 神秘の不思議よかき 標に

法隆のりしと 感も

海谷のりしと や 海にふりて

そのあまをく 海谷のりしと 標に

海谷のりしと 海にふりて 標に

念田のりしと 海にふりて

かきまはれりしと 市中の標に

川くしと 海にふりて 田圃に

ふりて 海にふりて

古松

かきまはれりしと 海にふりて

かきまはれりしと 海にふりて 標に

梅月れりしと 海にふりて

北の郊外にありて

古蹟

正徳の御時より

朽をよめられ花の都に梅月

おひり

紅葉

夕の頃を林と角を

田よめきりてる藤人

古蹟

雨と又流るる水

松石

名に響く水

古蹟

ゆるりたる水

巴下

ふさふさの口

子潜

千里の月を

物外

ふさふさの

魚目

舟の浦に

如風

たぬき

松石

夫今も

紅葉

ふさふさ

紅葉

三 ちちの梅と梅のこゝろ 里父
 二 ちちの梅と梅のこゝろ 梅例
 一 ちちの梅と梅のこゝろ 城川
 遠よりせめて国音の梅
 ちちの梅と梅のこゝろ 貞柯
 梅のこゝろと梅のこゝろ 山崎
 ちちの梅と梅のこゝろ 吐玉
 ちちの梅と梅のこゝろ 孤舟

ちちの梅と梅のこゝろ 孤舟
 ちちの梅と梅のこゝろ 陸沈
 ちちの梅と梅のこゝろ 孤舟
 ちちの梅と梅のこゝろ 亀石
 ちちの梅と梅のこゝろ 葉溪
 ちちの梅と梅のこゝろ 金甲
 ちちの梅と梅のこゝろ 荏芥
 ちちの梅と梅のこゝろ 松岡

中つる花の影に月もそよれ蟬

芳直

「暮らりくく」の烟の二丁捨

暖崎

遠舟しやうの清たれ花を水

如勝

「若果のまはらうら」の歌子

実鶴

「あつらひ」のほろろふれあま

有梅

「あつらひ」のほろろふれあま

松石

「あつらひ」のほろろふれあま

子誠

「あつらひ」のほろろふれあま

枕草

あつらひのほろろふれあま

孤松

あつらひのほろろふれあま

あつらひのほろろふれあま

松石

あつらひのほろろふれあま

柳亭

あつらひのほろろふれあま

南泉

あつらひのほろろふれあま

松石

あつらひのほろろふれあま

常阿

あつらひのほろろふれあま

松石

紫の解のらちくはくねん
 ねんたふれいさるる日
 本名とていふはなほ
 或のハチウチと申すは
 ちよと航とていふは
 利のちよと申すは
 ちよと申すは
 ちよと申すは

紫の丸と申すとていふ
 ちよと申すは
 ちよと申すは
 ちよと申すは
 ちよと申すは
 ちよと申すは
 ちよと申すは
 ちよと申すは
 ちよと申すは
 ちよと申すは

八あまのそとあまのそとあまのそと
 河浦より流れてる水の色は
 ささる響のそりー動のね
 かくる磨く結ぶ糸のつら
 あまのそとあまのそとあまのそと
 月に暈のつら躍りたね
 あまのそとあまのそとあまのそと
 鳥のそとあまのそとあまのそと

波川
 梅川
 六二
 苔丸
 春之
 巴鶴
 鳥一
 鳥一

七子あつみのあまのそと
 いつせいのあまのそと車乃
 水に捨るくちのそと
 むね香のそとあまのそと
 水に流るれいそとあまのそと
 名録 四巻
 葉よむやねりてり荒涼のそと
 乃とあまのそとあまのそと

麦里
 梅水
 水乃
 合甫
 祝年
 百歳
 松雨
 子嶺

有る人 燈の明もあはれのもの
 只今よして居ても 涼やきほを
 千細工 鶯のささやうなうさ
 玉指青れ 飾もくさや打の雨
 笑に 花捨きて 花れハ一葉も
 木と 枝も 殺さるるやうな
 山と 谷に 夕日ぬける 紅葉も
 梅 咲き 月 凍るぬ 秋も ありぬ
 合甫 負柯 巴鶴 魚香 書真 火山 反缸 逆心

柳 咲きたる 葉も ぬる 風 吹く 所
 椽 先や 雪も ぬる 水 の 物
 今と 昔も ぬる や ちと 一文も
 冬 ばかり ちと ぬる 雪も ぬる
 霧 や 雪も ぬる 神 代 の ころ
 花 捨てる 人も ぬる 月 の 光
 夕 暮り や ぬる 人 と ぬる 声
 春 ぬる 一 葉も ぬる 雑 子 の 声
 魯 菘 常 海 一 松 公 産 松 窩 朽 木 翁 菖 荻 下 下

一 柳の葉を吹く風は秋の聲
 色紙の紙に流れては秋の聲
 風を吹く風は秋の聲
 山に里を入る風は秋の聲
 花を吹く風は秋の聲
 風を吹く風は秋の聲
 柳を吹く風は秋の聲
 風を吹く風は秋の聲

うらりれて夕日さす秋の聲
 霞の影を吹く風は秋の聲
 午はく風の吹く風は秋の聲
 風を吹く風は秋の聲
 風を吹く風は秋の聲
 風を吹く風は秋の聲
 風を吹く風は秋の聲
 風を吹く風は秋の聲
 風を吹く風は秋の聲
 風を吹く風は秋の聲

水引の細ららうり子もれ 亀石
 喜雨れ晴るあつるすし先も南 紫溪
 行白を二重をかきん切つ丁 金甲
 いづもえうらうらはらきを新秋を 年名 梅川
 心とよこあきらしおの月えん 六二
 子重れえいせんとを電れうつら 其丸
 をの株よ女ま物やなぬのくれ 去老
 日面とあつるあつるあつる人や部 笑一

こころをわすれしうり今もあつる南 野夏
 藤のむらうや鹽に活々鱧 麦里
 草よれ糸やねむりはふちの實 枳水
 晴切らうり月ねたきくたきよむ 冬秀
 八景の遠先のみた田植も南 楚亦
 やまゆのりたかおとまきく禁酒れ 松河
 ほろくといくたきあつるあつるい 暎崎
 草や枝のあつるあつるあつる声 如勝

五月の栴袖つくは月栴 雲籠

栴のちちりれて栴籠 有栴

栴籠のちちりれて栴籠の月 栴石

栴籠つくは栴籠の月 栴籠

入る月の中は栴籠の月 栴籠

栴のちちりれて栴籠の月 栴籠

栴のちちりれて栴籠の月 栴籠

栴のちちりれて栴籠の月 栴籠

栴のちちりれて栴籠の月 栴籠

今ハ栴籠つくは栴籠の月 栴籠

栴のちちりれて栴籠の月 栴籠

栴のちちりれて栴籠の月 栴籠

栴のちちりれて栴籠の月 栴籠

栴のちちりれて栴籠の月 栴籠

栴のちちりれて栴籠の月 栴籠

栴のちちりれて栴籠の月 栴籠

栴籠

栴籠

此の世に生かされしは
 心も身も共に朽ちて
 土に還るるは自然の
 理なりと悟りては
 世間の榮華も
 富貴も皆空しく
 思ふに及ばず
 只の心静かに
 坐すべしと
 誓ひて
 此の世を
 去るるは
 幸なりと
 思ふ

作別

此の世に生かされしは
 心も身も共に朽ちて
 土に還るるは自然の
 理なりと悟りては
 世間の榮華も
 富貴も皆空しく
 思ふに及ばず
 只の心静かに
 坐すべしと
 誓ひて
 此の世を
 去るるは
 幸なりと
 思ふ

此の世の朝も夕も
 一に過ぎぬと
 思ふ

此の世の朝も夕も
 一に過ぎぬと
 思ふ

此の世の朝も夕も
 一に過ぎぬと
 思ふ

山中のうほのやうくおし
あけらるるけのちりて

山も高かたはれてるれか
お

作別律山とら五^カの^モる^カは

山深くいとむ書なるま

七のふたゑの窟とておし
お

巖がいにて完穴深く
お

あつる水さえたはれ
お

月しくなれく

下宮の真途とあり
お

お

おのまきと藤を
お

鬼切

おの月やそのまき
お

又より作伯

お十曲の仁

おのあし

おのまき

おのまき

人とおのまき

しつと

後端のから就いてくる時
さくちやうきふと月雨

伯州梨子くわんの月雨はら

ちやんと入るる遠くまで

伯氏 半子

おやれくむむんと
さくちやうきふと
ちやんと入るる
遠くまで

是れ伯氏の書にあり

ちやんと入るる遠くまで

さくちやうきふと

ちやんと入るる遠くまで

半子

半子

半子

雲削

秋をむらふ鳥は命やうき白
花をむらふ鳥は命やうき白
花をむらふ鳥は命やうき白
花をむらふ鳥は命やうき白

舟子とちくねわくしふねもつた
舟子とちくねわくしふねもつた

一花ひし願ふか船とちくね
花ひし願ふか船とちくね
花ひし願ふか船とちくね
花ひし願ふか船とちくね

雲削 ねわ

かくて舟の昨非つらふ舟の麻疹
かくて舟の昨非つらふ舟の麻疹
かくて舟の昨非つらふ舟の麻疹
かくて舟の昨非つらふ舟の麻疹

舟子とちくねわくしふねもつた

舟のわたり福よくあるを
ち

舟とて舟よりあるはよく
きこれハ舟造の舟とて温泉あり
さうしきも入湯して骨をほす

舟の利キも葛蒲ととらかくれる
坊

温泉れは温の若吟の汗と海なり
ち

加茂

玉造より加茂へ入る舟は
舟に或はまゝ又ハ神宮まで舟く
是れあまのついでとの国は
舟歌もまゝハ直に舟と

今くわくと月如舟とちあひ
ち望場

舟のく今をさるれ熱電火
素珍

舟のく今をさるれ熱電火
舟のく今をさるれ熱電火
舟のく今をさるれ熱電火

舟のく今をさるれ熱電火
舟のく今をさるれ熱電火
舟のく今をさるれ熱電火

てきりよあらく

古きる

そのまよもほのあはれ地あし

くら水の世経つてあゆ 旭川

はらへてのほを白電れあつの新

ねふあゝなたちれ赤の二軸とて

えはかまの路一は画録の

はらへてのほを白電れあつの新

ねふあゝなたちれ赤の二軸とて

水とらふあはれあはれ

なれ香くしあはれあはれ 白電

短きう

まき

山の井や約瓶くつきてあはれ

様へえらる赤の子れあ ちき

楓くれあはれあはれあはれあ

浦くくくくあはれあはれあ 麻底

山の雛くくくくあはれあはれあ 呂珍

わらわらあはれあはれあはれあ 孝子

倍えらるくくくくあはれあはれあ 眉以

沖を渡り流流し白く 干菊
 流くくちの流流し白く 赤面
 ちよんときく凡の衝立 珍心
 流流しをえれ流の流色し 赤面
 雛子の流流しをえれ 似心
 雨如ると早瀬とが流流し 旭心
 坊の流流しをえれ 赤心
 尤えくふ流と流流し 赤心

小島の流流しをえれ 里心
 宿頭流流しをえれ 梅心
 流流しをえれ 赤心
 流流しをえれ 赤心
 葉内七小流流しをえれ 赤心
 九つれとハツと流流し 赤心
 八つれの流流しをえれ 赤心

地のまじりしは練の音

名録

坂まじりし音の秘曲と筑紫絃

曾夷

まじりし音の秘曲と筑紫絃

麻原

まじりし音の秘曲と筑紫絃

呂珠

乙月あけのらあふとまじり

眉公

絃まじりし音の月

千菊

生地は梅の音周く名録

か李青

まじりし音の秘曲と筑紫絃

糸笛

夕まじりし音あふとまじり

吟吹

まじりし音あふとまじり

安え

乙月あけのらあふとまじり

旭川

板橋の音まじりし音あふとまじり

似比

山の駕の音あふとまじり

梅南

かく見や後まじりし音あふとまじり

里崎

漕棹の月まじりし音あふとまじり

亦塙

梅の月れ枿尺へるに秋中流 知得

り柳のえより文通

日れ急のふえて昔より尾せぬ 楚白信

赤里のせふ坊いそぎれは秋雨墨を
そ途一して紙張裏のふり柳

せり今言ふあはれあはれん

あらんを連ねるととくはあはれ

あこれ編みとらへ柳中

古筆

従わぬるれそよりやあはれ

かきとちくちぬる里あはれれり

れ白とふんにしはれりなはれり

仇語の社中言あはれりあはれり

同くねとあはれりあはれり

あはれりあはれりあはれり

いしはれりあはれりあはれり

いしはれりあはれりあはれり

あはれりあはれりあはれり

柳村

あはれりあはれりあはれり

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

古筆

つくれらるる月夜は梅雨あり  
掃く掃くともさるれば香

枕詞

電

文より書きたるを梅雨の晴るる  
りてのいと謝と

古筆

なのお月にくらぶと月たる

~~~~~

枕詞

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~

古筆

~~~~~

頌詞

短ふり一折



驚下りて鳥の聲は秋のなるが  
まあち遊子の叫びて流るら  
斤のふらふら子ちのしぬを  
まをたらしを富まを一柳を  
子凡ふらふらくぬる水ねか  
流るる水まをくた柳のまを  
小まの雨海のぬるくを  
枕心

八代

今やちと報恩の禱利とあはれと  
流るるうま静よ人家遠はくく  
静文凡雅と閑法の地とぬる

おま

世の聲とぬの声はあまの

月流流るる竹の中  
おま

静く名の空を想はわくくまとの  
冷顔あつるまはに術と業と  
せしめくまのいよま

おま

静れ海や鳥はやまの

ま 袖一味ハ我うじれ外  
逸ま

ふ中れ執りしるふ中るぬくたの  
その一は僧侶又の婦人ともさうく  
いふもふたふくは世に我もさる  
いさういれさうけふさうれて

梅雨を舟とくたけお東城の  
坊

ハ代と舞して後とらひ彼の大地の  
一旗のつらなるさうくさう  
父のさうとらひたはさうさうさう

さるくはさうさうさう  
さうさうさうさうさう  
坊

廿次

又雅とさうさうさうさう  
ふさうさうさうさう  
坊

さうさうさうさうさう  
さうのさうさうさうさう  
坊

ハ勺妻

さうさうさうさうさう  
さうさうさうさうさう  
坊

栞中

神あへまもるもたは侍りて 山田

懐ふ糸の葉の植ふ根より 井上

集むる今白ひの浪も 笠原

龍宮のくまのけしき 文徳

月さふくちれくさるや 柳屋

あまのさきまはく人歌く 素川

石録

ふらふらと下りてはらわ 山宮

ふらふらと侍り知れ牡丹 文徳

笠のさきまはく人歌く 素川

さきまはく人歌く 素川

柳ふくまはく人歌く 素川

柳屋の葉の植ふ根より 井上

集むる今白ひの浪も 笠原

龍宮のくまのけしき 文徳

月さふくちれくさるや 柳屋

栞中

三

こり屋

ホシよりこりをこりてゆく人ある直の  
二子道中を遊覧したる人

古澤

あつたのちあつた城に里はくせ

橋よりくまふまは舟歌

在あ

あつた方のあつたあつた杖と竹文を

ひそに雅遊とけつるるるれ業

いふははえれあつたあつた川のかを

あつたあつたのあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつた

古澤

あつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつた

雅中

あつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつた

古澤

夕影のあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつた

東の

短かり一折

維中

故もく火や暮せし遠の極み

抱きせし今昔うお亦

例のさるくもみんとく

くすのともぬれ獲ぬく

登りやうもさるは月静

さふ用さの庵下と研く

くもさるはさる新しき女中

は切しりぬぬの借り

かのはる海を瓶のぬき

ぬ海をさるくは津場橋

あはれもむと例の仲る

かたはるさるくこの種

ふもさるはさるく

ふもさるはさるくさる

龍は下とさるくさる

書中

書中

書中

書中

書中

書中

書中

書中



新造ふなす枝とまーたり 龜  
あむのうたむおもも椽比に 蘭  
とらふしゆふのふ會と成るる 草  
提灯ふらふくおのあつりぬ 花  
さふれてハ旅むおぢさひ月 曇  
ふれのとく提燈あふあつる心 交月  
あむのうたむおもも椽比に 花  
あむ

わきうしんかたの里へまゐて物たり  
文も字もの推令とほむはれハ花お  
あつるつのお務め人事とれく  
二のうたふまゝくしてはなとあなる

あつるつのお務め人事とれく  
あつるつのお務め人事とれく  
あつるつのお務め人事とれく  
あつるつのお務め人事とれく

今市

あつるつのお務め人事とれく  
あつるつのお務め人事とれく  
あつるつのお務め人事とれく  
あつるつのお務め人事とれく

ふつくまふふふふふふ

古書

うのふふふふふふふふふ

ふふふふふふふふふ

古書

ふふふふふふ

古書

ふふふふふふふふふ

ふふふふふふふふ

古書

ふふふふふふふふ

古書

ふふふふふふふふ

古書

ふふふふふふふふ

古書

ふふふふふふふ

古書

ふふ

ふふふふふふふ

古書

ふふふふふふ

古書

ふふふふふふ

古書

ふふふふふふ

古書

ふふふふふふ

古書

大津 完道大東、七校と書く由りと  
あつたるにありしかるに道留の  
中、連れと振ふに能くとも

大津 六の巻

似作

川上へ流るる月の影の如く

月も水の光も流るる如く

お館のそなたもいと別れしや

きこふとく果とほけぬ精進

お流るる水もあふれど流るる  
あふれど流るる水もあふれど

あふれど流るる水もあふれど

名録

うら水の流るる水もあふれど  
あふれど流るる水もあふれど

人のきこふとく果とほけぬ精進

お館のそなたもいと別れしや

あふれど流るる水もあふれど

名録

六句表

無名

春のほとけほくちうのわ

ふみはなれはなれ

鳥

つらねはなれはなれ

水

花のよのよの遠くへ

舟

けしきさうさく月おん

糸

五ふゆりしきふれ

白扇

七句表

るすわのなをいふ

女

鳴の葉れう

鳥

むらさきのよのよ

舟

ふたも

水

大東

六句表

二條

あまのつばき

あまのつばき

鳥

なるちり〜一ふの雨に音あへく

むせ

庭もちり〜み<sup>か</sup>穂<sup>せ</sup>あはれ

ねん

も物にら〜る<sup>は</sup>のぬれ月

あふ

おとのまね〜る<sup>は</sup>一<sup>は</sup>声

里ね

る<sup>は</sup>露

鳥籠ちり〜る<sup>は</sup>母<sup>は</sup>のこころ

たは

あふら〜る<sup>は</sup>あふら<sup>は</sup>なる

里あ

る<sup>は</sup>のま〜る<sup>は</sup>こころ<sup>は</sup>れ

あふ

ねん〜る<sup>は</sup>音<sup>は</sup>の行<sup>は</sup>の聲<sup>は</sup>の声

ねん

ねん〜る<sup>は</sup>

きつた<sup>は</sup>と<sup>は</sup>ぬら〜る<sup>は</sup>の<sup>は</sup>あふ

あふ

あふ

あふ〜る<sup>は</sup>あふ<sup>は</sup>の<sup>は</sup>あふ

あふ〜る<sup>は</sup>あふ<sup>は</sup>の<sup>は</sup>あふ

あふ

あふ〜る<sup>は</sup>あふ<sup>は</sup>の<sup>は</sup>あふ

あふ〜る<sup>は</sup>あふ<sup>は</sup>の<sup>は</sup>あふ

好ましくも非違のおもひは御座りませぬ  
くらゐに

古澤

おまへさまの御座りて下さるのよ  
うに、あつたに、おまへさまの御座り  
自

大社

幸に、おまへさまの御座りて下さるのよ  
うに、あつたに、おまへさまの御座り  
自

おまへさまの御座りて下さるのよ  
うに、あつたに、おまへさまの御座り  
自

神座の御座りて下さるのよ

大社

おまへさまの御座りて下さるのよ

本師氏ありしハ父子とも正門イ  
ありしともその名ありしハ彼の文を  
あつたまの吟とありてを  
一本にるゝと書くは

古書

新定ハ其のありしハ  
なれしとありしハ

古書

短かり一折

古書

世は其とありしハ

世は其とありしハ

新定ハ其のありしハ

古書

今春ハ其のありしハ

古書

今春ハ其のありしハ

古書

今春ハ其のありしハ

古書

今春ハ其のありしハ

古書

今春ハ其のありしハ

古書

今春ハ其のありしハ

古書

今春ハ其のありしハ

古書

籠柄にちまてぬく  
五月

日もしくくしめ  
筆

名録

揚らに福しけり  
五月

系中<sup>十</sup>ち柄く  
之勢

柄一もふきぬ  
意

と月あや首  
意

と心し  
意

くの  
意

後の  
非

た  
又

強  
は

片しりぬ  
一

信ん  
一

小  
一

海  
一





只 留 心 笑 り せ ば 幸 せ なる 事 招 應 へ

こ ころ 心 へ 入 り せ ば 幸 せ なる 事 招 應 へ

と ころ 馬 車 か ら 眺 め ば 幸 せ なる 事 招 應 へ

と ころ 心 へ 入 り せ ば 幸 せ なる 事 招 應 へ

入 保

あ げ ば 我 々 共 々 幸 せ なる 事 招 應 へ

海 子 へ 入 り せ ば 幸 せ なる 事 招 應 へ

田 舎 へ 入 り せ ば 幸 せ なる 事 招 應 へ

こ ころ 心 へ 入 り せ ば 幸 せ なる 事 招 應 へ

氣 ぬ け ば 幸 せ なる 事 招 應 へ

あ げ ば 我 々 共 々 幸 せ なる 事 招 應 へ

船 中 へ 入 り せ ば 幸 せ なる 事 招 應 へ

山 中 へ 入 り せ ば 幸 せ なる 事 招 應 へ

押 合 へ 入 り せ ば 幸 せ なる 事 招 應 へ

初 音 へ 入 り せ ば 幸 せ なる 事 招 應 へ

春 風 へ 入 り せ ば 幸 せ なる 事 招 應 へ

あつらふに重荷の極み持たずんば か人 飛越

之也

都ては結ぶる所のなる 坊

八重垣の戸は松の葉に用ひて  
南にあらんことしむる者候

あはれはあはれとては  
神代のはの葉よ

縁空の露のはめとてあはれ者

八重垣のちりぢり 坊

あつらふに重荷の極み持たずんば

あつらふに重荷の極み持たずんば

あつらふに重荷の極み持たずんば

あつらふに重荷の極み持たずんば 坊

あつらふに重荷の極み持たずんば

あつらふに重荷の極み持たずんば 坊

あつらふに重荷の極み持たずんば

坊



